

新

しいコンピュータ博物館を考えたきっかけは、今年の全国大会イベント「私の詩と真実」である。今のコンピュータ社会を築いた人々と、スマホに熱中する人々との間に、考え方にも感じ方にも大きな乖離があることに気付いた。

今回は宮城嘉男氏と嶋正利氏で、お二人とも心に響く感動から詩が生まれ、成就する過程の真実を、熱意を込めて語っていた。

スマホに馴染んだ人々は、自分を楽しませ興味のあることに夢中である。親に守られて塾通いをした若者たちは、欲しいものだけを選び、後は捨ててしまう。教師でも10年間にパソコンを7台も買い替えては次々とポイ捨てし皆そうだと平気で言う。東日本大震災の被災高校への支援としてスマホが贈られ皆スマホを使っている。パソコンもITに詳しい人にお薦めを聞いたら、もうパソコンの時代ではないでしょうと言われてしまった。

1970年文部省はこれからはコンピュータ教育が必要と学習指導要領を改訂し高校数学に電子計算機と呼ばれていたコンピュータ関連学習を数学II Aに入れた。当時私は女子高の数学教師であったが、カリキュラム作成会議で中年の男性教諭から「女の子には難しい数学は要らない」との発言が飛び出した。これが議論を呼び、激論の結果賛成多数で、10クラス中8クラスで数学II Aの学習が決まった。途方に暮れていたとき米国大統領科学諮問委員会報告で「いかなる米国民も2流の教育を受けることがないように」とあるので「我々は第1流の教育を目指そう」と決心した。

とにかく勉強をしているうちに分かったことは、プログラミングとは与えられた入力から論理の鎖を紡いで出力を得る手続きで数学的思考の手順と同じである。だが、プログラム作成に必要な言語の習得は数学ではない。そこでFORTRANにかかわって数学に馴染みやすいAPL (A Programming Language) を使うことにした。APLは高校数学で接線や連続の概念を証明抜きで与えるとき一次変換によるイメージとともに重要な働きをする。宮城県に数学教員のグループができIBMから

APLマシンでベトナム戦争のとき空調の利いたコンピュータ室から初めて出し戦場で使った5100等の4機種と、言語をソフトで持つ5550を借用した。

5年が過ぎ機械を返還するとき、行方を尋ねると海の底に沈めるという。私にとってコンピュータは人間の頭脳の働きを拡大するいわばもう一人の自分である。あまりのことにAPLマシンの展示室を作り皆の交流の場にと計画活動した。1994年IBMは幕張にビルを建てコンピュータギャラリーを開設、APLマシンの落ち着く先がここに決まった。

2000年に第9回数学教育世界会議が幕張で開催、我々グループの成果が参加79カ国の前に披露された。しかしIBMのギャラリーからはAPLマシンは撤去

応
般

[シニアコラム]

IT好き放題



[No.32]

新しいコンピュータ博物館 建設をのぞむ

されていた。

2003年文部科学省は教科「情報」を新設、情報教員の不足を数学に求め、宮城県のグループから半数を引き抜き、コンピュータ管理は情報科に移して授業を開始した。文部官僚のこの強引さに、我々の詩と真実は雲散霧消した。

現在コンピュータ博物館は2001年以来学会のWeb上に制定されているが、その実物はわずかに2009年学会が認定した日本で7カ所の分散コンピュータ博物館にしかない。

私のがぞむ新しい博物館で、訪れる子どもたちに、現在を作ったコンピュータの実物の前でアシモ君のような最新の人形ロボットが立って案内しながら解説してくれたら、子どもたちは喜び驚き感動するだろう。大人には知りたいことを助けてくれるレファレンスコーナーが、年に一度は企業等の新製品紹介イベントがあれば、楽しい博物館となるだろう。

博物館としては「はみだし」かもしれないが、先人の蓄積をこれからの伝える絆となってくれるだろう。子どもたちの感動が「詩」の源泉となり、「真実」に向かう勇気をもたらす博物館を私はのぞんでいる。

(2013年6月24日受付)

橘川 孚 Makoto KIKKAWA

(有)情報教育研究所

[正会員] bxd01017@nifty.ne.jp

(有)情報教育研究所代表取締役、1951年尚綱女学院高校数学教諭、1971年宮城県学習指導要領作成審議会専門委員、1984年尚綱女学院短大講師、2001年(有)情報教育研究所設立。